
my home town

ホンジャマカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my home town

【Nコード】

N9312K

【作者名】

ホンジャマカ

【あらすじ】

部活で一緒だった後輩。

彼との出会いが俺を大きく変えたんだ。

実話からの友情を描いた物語。

心はどっへ（前書き）

彼と出会って、彼と俺の気持ちの変化までを。

心はどっへ

彼は、俺の一個年下

高校時代の後輩

同じ部活で時を過ごしてきた

その時は先輩、後輩の仲だったけど

今は、俺が勝手にそう思ってる

「俺の弟」

それぐらいの、深い絆

出会いは 中学校時代

剣道部のつながりで地区の大会には大概、見かける程度で
あまり感心なかったのが事実で

高校で同じになった時は、

なにせ全国目指すような部活だったから

とにかく練習練習で

抱く感情は仲間意識

でも、俺は引退して部活に顔を出さなくなってから

彼に興味を抱きはじめた

その容姿は、顔が属に言う童顔

かっこかわいい系とでも言うべきか、

それに加えて人とは違い少し小柄な体格の

まさに少年のような姿に魅力を感じてしまった自分に

まさかそっちの気が!?

っと思っくらいだったが

そうのじゃなく

話をしたり、実際に接してみると

心のままに生きている、
まさに少年のような性格で

そんな彼ともっと仲良くなりたいと思ってた

でも少年だから、すぐ飽きる
とか

B型ってのもあるかもしれないけど

自己中心的なところがなかったと言ったら

多分嘘になる

でも、ある日の出来事で彼は大きく変わって

俺と彼の仲は深まった

その日は初雪の降る前日

部屋で携帯をいじる

カラオケで歌えるような曲を探して、

口ずさみながら

ふと玄関から呼び鈴

見下ろしたら 彼の姿があった

思い返したら、2日前彼と俺ともう一人の後輩で宅飲みしたのを思い出す

最初はなにか忘れたのかと思ったけど

明らかに様子がおかしい

息はあがり、瞳は焦点が合わず錯乱している状態だった

「ちょっと、上がっていいですか？」

「ああ、いいよ」

部屋に入れて改めて事情を聞いてみる

「彼女から 別れのメールきたんで…」

ふと間があく

「ああ、そうか…」

それしか 言葉が出なかった

おもむろに携帯を取り出して

「なんか、とにかく別れてほしいらしくて

いま、向こう答え出すまで待たせてるんで…

「言っただほうがいいですよね…」

彼と彼女は付き合って5ヶ月だった

彼は彼女に一途で、

つい最近まで彼女にやるプレゼントを相談されたこともあった

「カラオケ行って…彼女に聞かせたい歌あったんですけどね…」

思わず声が漏れた

「納得しないまま終わんのか？」

「大好きなんだろう？」

「…はい」

静かにうなずきながら

そう答えた

そして、彼は外で彼女へ電話

俺も外で待つて、

でも、どうしても会いたくないらしく

耐えかねた彼は

「もうわかった！ … もう いいよ」

「俺が悪かったんだよね…
…重すぎたんだよね…」

「いままで ありがとう…」

戻ってきた彼は

俺に

「…別れました」

とにかく部屋に戻る

「
…」

彼はうつむいたまま

泣いて

ただ
…

ただ泣いて

なにも言葉がでてこない

彼の泣く姿を見ているだけ…自分に嫌悪しながら

そう、思った

普通なら、励ましの言葉くらいかけるんだろうけど

なにも でなかった

「…じゃあ ……俺帰ります…」

「大丈夫か？」

「…はい」

「お邪魔しました…」

帰ろうとする彼の背を見て

思わず

「俺は、応援してるから」

「また 相談してな」

最後の最後、振り絞って でた言葉だった

「はい、ありがとうございます」

そう言って

自転車にまたがって、帰っていった

「ホント俺、不器用だな…」

次の日は、一日中彼が心配だった

変な気 起こしてないよな…

仕事が終わって

メールを確認すると

彼から入ってた

これから会いたいってことだった

すぐに帰って、彼を迎えに

俺の部屋に入れて、熱いココアを

「…昨日、あの後　家帰ってから全然寝れなくて」

おもむろに彼から口を開く

「ご飯も食べる気力なくて…」

相当なショックだったことは、言わずとも感じ取れるわけで

「クラスの友達に、泣きながらだっ たんですけど
相談したら、友達も

今までそういうふうに相談してくれたときなかったから、相談してく
れてありがとうって

一緒に泣いてくれて」

「その時、友達の大切さに気づいて」

涙ながらも 淡々と話をしてくれる彼に

胸が熱くなる一方、本当に良かったという安堵感と

そついうところが若干欠けていた彼に

少しずつ、成長している姿に

何様と言われるかもしれないが、

頼もしい気持ちでいっぱいだった

「いやあ、 本当によかったあ」

「かなり 心配してたんだ」

「本当、ありがとうございます^^」

その日は 遅くまで彼と一緒にで

帰り、送って行くときも

もう前向きになりつつある彼の気持ちに

安心しきっていたのが実際に

次の日の彼の行動が 予想も出来ないくらいだった

次の日

心配がまだ抜けきれなかった

仕事が終わってから メールを確認

彼からは入ってなかった

こっちから送ってみる

「大丈夫か？」

返ってきたメールは

正直、驚いた

これから彼女の友達に会いに行つて、話を聞いてもらいます

外はそれなりの、ブリザードとまではいかないが
かなりの雪で

もう辺りは 暗くなっていた

ましてや電車だから時間がかかるのは尚更なわけで

でも

どれだけ彼女に対して一途なのかは、

別れた直後の彼の姿を見ているから

相当なものなのは わかりきったことだけど

本当に、心から好きなんだと

感じ取れたわけで

「大丈夫か？　かなり降ってるから、気をつけて行けよ」

応援したい気持ち

沸々と

「はい、心配してくれて本当にありがとうございます>>>
帰りの時間わかったら連絡します。」

本当に 頼もしかった。

これだけ出来るのが

凄かった

これだけ 心のままに生きられるのが

本当に

羨ましかった

ドラマのような展開が、
起こるわけないと

そんなのくだらないと
ずっと思ってた俺にとって

彼が

とても

素敵に見える

ますます

魅力を感じる

人との出会いは

浅く 時には深くなって

友達以上の関係を築ける

こんな気持ちになったのは

初めてだった。

次の日も、彼に会いに

話を聞きに

彼女の友達に話を聞いてもらえたらしく、

彼女になぜ別れたいのか聞いてもらえないかと

一方的に会いたくないと断固と拒否しているから

これしか方法がないのが事実で

とにかく、彼女の友達からの連絡を

ただ待つだけだった

その間、

彼の傷ついた心を

なんとか支える毎日で

本当に、毎日のように顔を合わせて

時には夜通し話をしたり

遊んだり

ある夜、

「夜景、見に行くか」

「夜景ですか？」

すぐ近くの夜景スポットへ

地元の街が一望出来る場所

「おゝ 綺麗ですね^^」

夜景は本当に大好きで、

眺めていると、心が洗われるから

傷ついた 心を癒やすには

一番いい場所

彼女が、一方的に嫌悪してるのは心あたりがあったようで

一途故に、相手はそれを重く感じてしまう

最悪、束縛感を覚えてしまうタイプで

また彼女もいきなりの、納得しないままの別れ方をした過去があるらしく

つい最近になって、元の彼からギクシャクした仲を

友達として

修復を求められ

心が動いたのか

彼女から元彼の話をされた彼は彼女に対して激怒

いろいろ言ってしまったらしい。

出来事が重なって

彼女の心は暗闇に染まる

人の気持ちほど難しいものはないと実感した

それにしても、

気になることがあった

なぜあの日

あの寒い中を自転車で

俺の家まで？

どうして俺だったのか

いや、頼ってもらえるのは本当に嬉しいかったけど

どうしても知りたかった

彼は

「俺も不思議なんですよ。

彼女から電話で別れ話されて、
頭が真っ白になってパニックになっ
て…

気づいたらチャリの鍵と携帯と財布 手にとって

先輩の家に向かって…

ただ、怖かったです…。

ショックで自分がなにかするんじゃないかって

かなり怖くて…」

それを聞いた時

本当によかったと

心から思った

下手したら、命に関わってたかもわからなかった

同時に、俺に頼ってきてくれたことが

本当に嬉しかった

彼が元気になるまで
支えると誓った

ところが、時が過ぎても

彼女の心は動くことはなかった

それでも彼はめげずに

会うことも、話をすることも出来ないならと

今度は、彼女宛てに手紙を書くことにした

今まであったこと、いろんな人に相談して、友達の存在の大きさに

気づけたこと

自分が変わったこと

ありのままを、手紙に綴った

最後の最後

それ以外の方法は

なかった

それに望みを

賭けた

でも現実には残酷なものだった

メールが一通

彼から

「先輩、やばいです。」

ぞっとした

すかさず返信

「どうした!？」

何した!？」

「——ちやほほ」

「最悪なことが 起きましたよ」

「ちょっと 待ってる!」

「すみません」

車を飛ばす

彼を拾い

人のいない駐車場

「…どうした」

「彼女の友達からメールきて」

もう、 戻ることはないと

彼の口から こぼれた

きつと またいつか戻ることを

一心に賭していた彼の心は

また 崩れていった

ショックの反動、心にもない言葉が

投げやりとなって

そんな彼の姿が

すごく 虚しかった

同時に、彼の力になれない自分の無力さに

はなはだ、嫌悪する

結局、彼の恋愛は

終わりを告げた

その後も、彼の心は癒やされるはずもなかった

なにせ、突然哀しみのどん底に突き落とされたのだから

俺は話を聞いたり、遊んだり、して気を紛らわすというか

時間が解決してくれるのを一緒に感じることはできなかった

だから、特別俺が彼になにをしてやったとも言えない

ただ、一緒にいることしか…

そんなときには 必ずといっていいほど

彼と夜景を見に出かけた

そこで学校であったこと、最近部活の誰がこうでああで

あの時はこうでああであって

いろんな話を彼と語り合った

夜景を見ながら彼と語り合つと 不思議と

素直になつて

心が安らんでいくのを

肌身にも感じながら

どこまでも　今が、続いて行けばいいのにと

彼といるこの時が　このまま、止まってしまえばいいのにと

そんな夢のようなことを

願うようになっていた

それぐらい 俺の中で

こつして彼とこつしている時が、何よりも

どんな出来事にも代え難く

比べようがないもので

有意義な時間だ

いつも彼から誘ってくれるが

俺からは あまりなかった

俺はいつも 彼からくるのを待っていた

ずっと

期待しながら

それが 俺の楽しみになっていた

心はどこへ（後書き）

こんな感じです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312k/>

my home town

2010年10月9日05時26分発行